オレの従姉は神のヨメ

部活の先輩たちに聞かれて、隆司(りゅうじ)はこんな話をしたことがある――、

小学一年の夏のことだ。隆司の一家は祖父の家に来ていた。

祖父の家は古い神社で、神社の裏には雑木林の小さな山がある。そこで昆虫採集ができるのではないか、と小学生の隆司は考えた。ただ、裏山に立ち入ってはならないという暗黙のルールがあることは、十分理解していた。そこで彼はこの計画を誰にも話さず、自分一人で決行することにした。同年代の親戚は女の子ばかりで、男の子はいなかった。

午前四時の起床を予定していたが、気が立っていたせいか、一時頃起きてしまう。それでも隆司は寝床を抜け出し、隠していた懐中電灯と虫かごを手に、裏山へと向かった。

山といっても大した高さではない。勾配(こうばい)は急だが、小径(こみち)も造られている。小径に導かれるまに登っていくと、山頂に小さな建物が見えてきた。

山頂の祠(ほこら)と呼ぶには大きい、人が住めるコテージのような建物だ。網戸をした窓の前には縁側があり、蚊取りリキッドが点灯していた。

明かりを落として薄暗い室内からは、女の、妖しい声が聞こえてきた。
「あっ、あっ、あぁっ、あっ……」
泣いているのかと思ったが、どうもそうではないらしい。声には一定のリズムがあった。
そして最後は、
「……はぅぅ、はちまん様ぁっ！」
と言ったようだ。そして、その小屋は沈黙した。
隆司は進退きわまった。鳴く虫の声は高らかだが、ここで足を踏み出し音を立てれば、屋内の人物に気づかれるかもしれない。
そう思っていると、屋内の人物の方から姿を現した。
「あら？　誰？　……隆司くん？」
さっきの声は、この女が発していたのだろうか。網戸を開け、寝間着（ねまき）の白い浴衣を着て現れたのは、由姫（ゆき）。辛嶋由姫（からしまゆき）だった。
ただし、当時の隆司は「由姫」という名前を知らなかった。隆司の叔母にあたるというその女は、親戚一同には〝姫（ひめ）〟とのみ呼ばれ、言及されていたからだ。
〝姫〟は年齢不詳。職業を聞いても、大人たちはただ「神の嫁」とだけ答える。だが、そう呼ばれるにしては、叔母に対応する叔父が存在しない、つまり彼女は独身のはずだった。
「隆司くん、ここには来ちゃだめなのよ」
薄暗くて表情は見えないが、たしかに〝姫〟だ。祖父の家は大きいので間取りは把握してお

らず、〝姫〟が離(はな)れに住んでいるとは気づかなかった。
そして、室内から、男の声がしたのである。
「……どうした？」
「うん。賢二(けんじ)兄ちゃんとこの、隆司くんが」
「隆司？　……おー、あの隆司か」
言いながら、暗い部屋の中から、その男は現れた。背の高い長髪の若い男。男は裸で、腰にバスタオルを巻いていた。――この男が〝はちまん様〟なのか。
「うぉ、大っきくなったなー隆司。前はこーんな、赤ん坊だったのになー」
「隆司くんは今年一年生なんだよ。ね？」
「……」
隆司は声を発することができない。辛うじて、小さくうなずくだけだった。
男は裸足のまま縁側を下り、隆司の肩にぽんと手を置いて言う。
「クワガタでも探しに来たか？　だがなあ隆司。ここには蛾(が)ぐらいしかいねえし、この裏山は入っちゃいけないところなんだぞ」
この山が禁忌の場所であることは、隆司もさっきから痛感している。
「そうよ。だから二度とここには来ちゃだめ。もし来たら、神様の罰(ばち)が当たるからね」
それを聞いて、男はニヤリと笑った。端正な顔で、子供向けの番組では悪役のみが見せる表情だった。

「もう帰って寝なさい」
隆司としても、一刻も早く釈放してほしいと思っていたところだ。
きびすを返すと、逃げるように小径を駆け下った――。

先輩たちは、ごくりと喉を鳴らし、隆司の話を聞き終えた。
「……イイ！　実にいいですなぁ。怪談と思いきや猥談。〝くわいだん〟ってやつですな」
「でもそれ、叔母さん夫婦が離れに住んでたってだけじゃない」
「いや……、それは違うな」
と、部長・志村さんの眼鏡が光った。
「……叔母君はあくまで神の嫁。特定の男性とは結婚しないのだ。私見では、彼女は神殿娼婦のような存在なのだろう。その神社には古来より秘密のスポンサーがいて、その男たちだけが〝姫〟のもとを訪れることを許されている。そして〝神の嫁〟と交わることで、男は神の霊力を我が物とするわけだ。……辛嶋少年は、その儀式の現場を目撃してしまったのだろう」
――という、せっかくの推理だが、当たっているのかどうか隆司にはわからなかった。
「え？　じゃあ、オチはないの？　実はまだ裏山にいるんです、とか？」
「いやそれが、そうなんです、というか……」
この話にオチはないのだ。
「……今は夏姫が〝姫〟を襲名していて、その離れも今は夏姫が住んでいるんです」